

「困難な状況にある青少年を対象とした支援プログラム」 試行・検証事業

○実施概要

平成19～21年度調査研究事業「特定の状況にある青少年の自立を支援するプログラム開発」事業により、北九州市の児童相談所の実例を踏まえたプログラムの有効性や特徴を把握することができた。

本事業では、児童養護施設および児童相談所の子どもたちを対象としたプログラムについて、関係団体や有識者との委員会の設置により、本施設の特徴を生かしたプログラムの試行・検証を行うとともに、山口県内の対象団体への普及を図ることを目的とする。

○試行・検証協力者委員会の設置

国立山口徳地青少年自然の家に関係機関の職員や有識者等による委員会を置き、事業を進める。

【協力者委員】

座長	◎井出 智博	静岡大学教育学部助教
	岩城 淳	山口県児童養護施設防府海北園 児童自立支援ホーム「海北ホーム」
座長代理	○遠藤 野ゆり	山口大学教育学部講師
	田中 秀紀	広島国際大学心理臨床センター助教
	藤田 浩介	北九州市子ども総合センター判定係長
	弘中 昭子	山口県周南児童相談所児童福祉司
(アドバイザー)	門田 卓史	(株)プロジェクトアドベンチャージャパントレーナー

【自然の家】

関 昭裕	所長
蓮見 直子	次長
山本 和宏	企画指導専門職
光田 喜幸	企画指導専門職

【試行・検証協力者委員会】

第1回 平成23年 8月16日(火)

本事業の進め方、これまでの事例、成果の把握方法等についての検討

第2回 平成23年11月21日(月)

北九州市子ども総合センター(ひまわりアドベンチャークラブ)の事例
暁の鐘学園(サマーキャンプ)の事例、成果の把握方法、各団体への周知利
用に向けた方策等について検討

第3回 平成24年 3月 5日(月)

来年度に向けての成果の把握方法、団体への支援方法について検討

【活動実施団体】

北九州市子ども総合センター : 第1回事業(2泊3日)	H23.7.9(土) ~11(月)	7/9※遠藤委員視察
[児童養護施設]暁の鐘学園 : サマーキャンプ(1泊2日)	H23.8.22(月) ~23(火)	8/23※遠藤氏視察
周南児童相談所 :(日帰り)	H24.3.25(日)	
[児童養護施設]済昭園 :(2泊3日)	H24.3.26(月) ~28(水)	
[児童養護施設]山口育児院 :(日帰り)	H24.3.27(火)	
[児童養護施設]下関太平学園 :(出前)	H24.3.29(木)	

【その他】

中国ブロック青少年体験活動フォーラム H23.11.26(土)~27(日)第3分科会において、北九州市子ども総合センターの事例発表

[児童養護施設]暁の鐘学園にて、委員の田中秀紀先生と共に、職員への聞き取り調査を実施

【成果と課題】

・県内外の児童相談所や児童養護施設に広報することで、児童養護施設での出前TAPを実施したり、日帰りや泊を伴う研修支援で本所を利用したりすることができた。昨年度までは、県外の施設や団体のみの利用だったのに対し、今年度山口県内の施設より2団体が利用することになり、これまで懸案事項だった県内の施設利用が少し進歩したといえる。

・「暁の鐘学園」の利用により、変容アンケートの集計結果を行った。井出委員の考察より小学生では、「協力的に行動している」、中学生では、「自分から進んで行動している」といった点でキャンプ前と後で評価が上がったことがわかる。田中委員の考察より、「仲間との感情共有」得点に関して分散分析を行った結果優位な点は見られなかったものの、「協調的な行動」得点に関して分散分析を行った結果主効果が認められた。遠藤委員の観察記録より、非常になごやかな雰囲気ですぐに野外炊飯が行われ、職員とも良好な関係が保たれていることなどが認められた。以上3氏の考察により、本事業が「困難な状況にある青少年」に対して有効な事業であることが伺えた。

・キャンプの効果を持続させるためには、事後にどのような活動が必要であるか、子ども達や担当職員への聞き取り調査を行い、他団体に対して情報提供ができるように調査結果の蓄積をしていくことが重要になる。また、聞き取り調査の項目を検討し、共通の調査項目を設定し、比較検討できるようにする。

・本事業で得られた内容を広く周知するために、フォーラム等を実施し、実際に利用した団体の職員に成果の公表をしてもらおう機会を作ることも大切である。県内及び県外の児童養護施設及び児童相談所の方に集まってもらい、生の話を聞くことができれば、またとない広報活動になる。

【活動実施団体の事例】

「北九州市子ども総合センター」との連携・指導支援プログラム

- 福岡県の北九州市子ども総合センターは、児童相談所と少年支援室の機能が一緒になった施設で、専門スタッフ（児童福祉司、児童心理司、医師、少年相談員など）が保健・福祉・教育の統合による総合的専門的支援を行っている。

- 当所での実施の経緯：一時保護中の中学3年生男児処遇が完全に行き詰まったことにより、当時の職員がキャンプを実施することを思い立つ。当所の徳地アドベンチャープログラムをやってみようという思いがあり、当所で平成17年より試行実施。平成19年より当所の調査研究事業として、プログラムを企画実施。

活動概要

活動名：アドベンチャーカウンセリング事業 ひまわりアドベンチャークラブ（HAC）

目的：自然の中での体験活動や問題解決に向けたグループ活動を通して、自己肯定感や信頼感を高め、協調性やコミュニケーション力を高める。

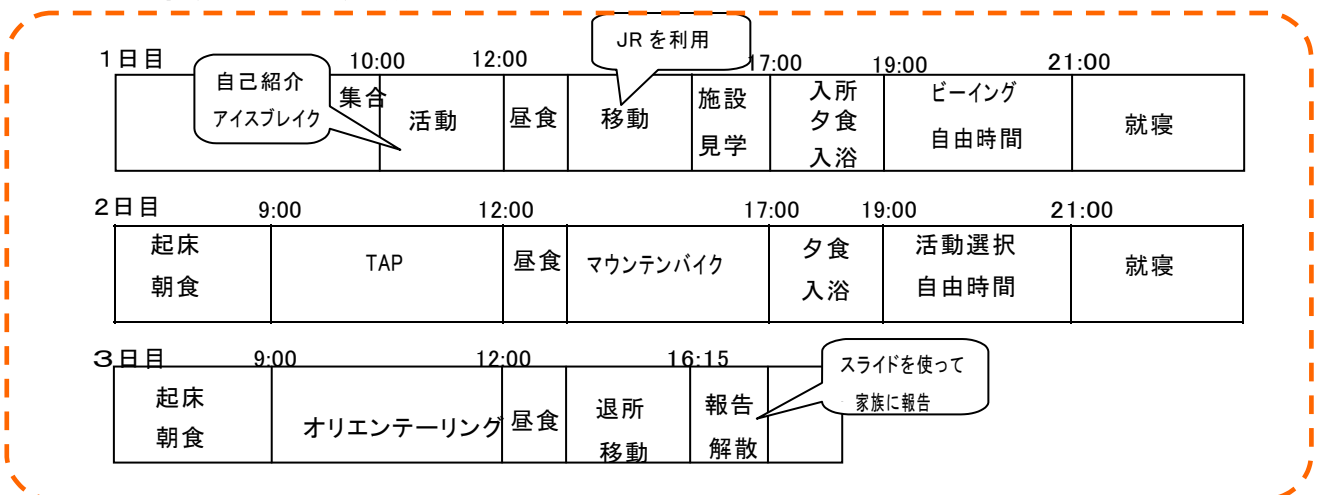
日程：平成23年7月9日（土）～11日（月）2泊3日

活動場所：国立山口徳地青少年自然の家

スタッフ：センター職員（男性2名、女性2名）山口徳地青少年自然の家専門職2名

参加児童：3名男児

プログラム：徳地アドベンチャープログラム（TAP）、ビーイング、マウンテンバイク、虫取り
オリエンテーリングなど



留意点：団体スタッフは、事前に参加児童全員の概要及びプログラム概要について情報共有。当所の専門職は、プログラムの指導支援だけでなく、参加児童就寝後にふりかえりや適時打ち合わせをするなど綿密に関与した。プログラム企画にあたっては、当所の利用状況を確認し、活動メニューから参加児童の希望を取り入れることとした。

効果の把握：今回、子どもの変容把握を行うための試行評価として、当所職員2名が子どもの活動の様子の活動記録をとり、記録シートを作成した。また、遠藤委員が1日目のプログラムに同行・視察を行った。また、3名の児童には、事前事後アンケートを実施し、2名はプラスの変容がみられたが、1名はほとんど変わっていない。しかし、初日に出会った時と最終日の表情には明らかに変化がみてとられ、3名ともその表情は柔らかく笑顔がこぼれていた。

徳地でのプログラムの特色は、TAPの他、変化する子どもの状態に応じて、プログラムを対応することのできる柔軟性が挙げられる。

いずれの活動においても、TAPの効果については、子どもと大人（指導員）との関係性に大きな変化をもたらしているものと考えられる。